



練馬区立開進第一中学校 開進一中だより

平成28年度 第5号 平成28年9月28日発行

あきらめない気持ち

校長 古山 真樹

リオデジャネイロで開かれたオリンピック・パラリンピックが閉幕しました。夏休み期間中のオリンピックは多くの方が世界のトップアスリートたちの熱戦に注目し、特に日本人選手の活躍に熱狂したことと思います。そうした中で今回教えられたのは「あきらめない気持ち」だったように思います。レスリングの女子3人は残り数秒からの大逆転、バドミントン女子ペアの16対19からの大逆転、体操個人総合の内村選手の鉄棒での大逆転、テニス錦織選手のタイブレークから5ポイント連取の大逆転、そして卓球男子水谷選手の中国人選手からの勝利も7対10からの大逆転でした。

逆境を跳ね返す強い精神力を身につけたからこそその栄冠です。常人では考えられないほど技術・気力・体力を鍛え抜いたからこそその「あきらめない」大逆転でした。そしてここに至るまでも、あきらめずに競技を続けてきたこと自体がすごいことだと思います。練習の苦しさ、伸び悩む記録、勝てない日が続く毎日。そんな中でもそれぞれの競技をあきらめずに続けてきた精神力があったからこそその快挙と言えるでしょう。普通の人には「つらい」「もう無理」であきらめてしまいます。君たちにそういうことはありませんか。勉強、部活、目標、将来の夢。簡単にあきらめていませんか。手の届かないような大きな夢でも、あきらめないことで、大きな前進・成長・達成感につながっていくことをメダリストたちが教えてくれました。

そしてパラリンピック。学校も始まり、テレビの放映時間が少ないこともあり、大きくは注目されませんでした。本当にすばらしかった。何よりもどの競技もたいへんハイレベルで気迫にあふれた熱戦に驚かされました。そんな中で、パラリンピックのプロモーションビデオでしょうか、映像と共に流れたテロップにはっとさせられました。こういう言葉です。

「ハンデがあるから…、障害があるから…、そんなセリフはあきらめる理由になりません。」重みのある言葉です。厳しい言葉です。自分からは逃げられないということを意味しています。

障害をもった人たちには様々な絶望、苦悩、労苦があったことですが、このようにサラーと言われてしまうと健常者である我々の方が「何を簡単にあきらめているんだ」と言われているようで、恥ずかしい気持ちになってしまいます。

ひと月以上に渡ったオリンピック・パラリンピックから「あきらめない」という勇気をもった気がします。

今月の言葉

あやまちを改めざる是を過ちという

今月の言葉はわかりやすかったのではないのでしょうか。「あやまちを犯してもそれを改めようとしない、そのことを本当のあやまちというのだ。」という意味になります。

人間はロボットや精密機械ではありませんから、思わぬ過ちを犯すものです。長い人生の中では、小さな過ち・大きな過ちといろいろあるものです。まず言い訳をせず、過ちを素直に認める心が大切です。そして、その過ちの原因を考えたり、反省したりすることで、次は間違えない、二度と同じ過ちはしないようにしようと心がけることに意義があります。しかし、「失敗しちゃった」「間違えちゃった」と軽い気持ちでそのままにしていたり、同じ過ちを繰り返し、過ちを過ちとも感じなくなると人生そのものを間違ってしまう。

「失敗は成功の母」という言葉もあります。過ちをしたならば、しっかりと反省し次に生かすことで、自分自身の成長の糧にしていけばいいのです。過ちを恐れずがんばりましょう。

臨海学校を終えて

担当 教諭 橋本 和加子

臨海学校の前日指導で、「臨海学校では楽しさだけではなく、緊張感や、自然を敬う気持ちをもつことが必要。自分以外のことに目を向ける、気を配ることで、自分が仲間にも助けられることがある。全員笑顔で帰ってこよう。」と、こんな話をしました。

水泳練習を開始した6月頃、生徒たちは自分のことで精一杯でした。泳力も伴わず、周りのことを気にかけたり、周りのために何かをしたりする余裕がなかったように感じました。しかし、練習を重ね、自信をつけていくうちに、応援したりアドバイスしたりする姿がたくさん見られるようになりました。



実際、海に行ってから、波や海水にもすぐに慣れ、3日目の遠泳は周りからの励ましの声や、何よりも生徒自身の頑張りで、全員が完泳することができました。完泳旗をくぐった時の誇らしげな顔は今でも目に焼きついています。

ひとつの事をやり遂げる経験はとても貴重なものです。生徒たちは、この臨海学校で仲間と寝食を共にし、3日間の実習を泳ぎ切ることができました。やり遂げたからこそ、協力すること、励まし合うこと、感謝することを学び、大きな達成感を味わうことができたのだと思います。

たくさんの方々のご協力があり、全員が笑顔で帰校することができました。この経験を糧に、今後も充実した学校生活を送ってほしいと思います。



『古都』で学び、『絆』を深めた修学旅行

担当 教諭 石黒 小百合

「古都～絆を深める旅へいざ～」実行委員が作成したこのスローガンには、『古都』京都・奈良に息づく日本文化を現地で味わい、また仲間との『絆を深める』ことを目標とする実行委員の思いが詰まっています。

振り返れば、修学旅行の準備にかけた期間は実質2ヶ月ほどと、決して長くはありませんでした。運動会後から、行動班・生活班決めから係会、班行動の計画立案等を行いました。

中でも最も時間と労力がかかったのは「班行動計画」でした。3年生たちは今回が班行動に初挑戦です。3日間すべてで班行動を行うこともあり、大変でした。どの班も、試行錯誤しつつ考え、それを教員や担当者の方々と吟味して無事に決め終えることができました。



しかし、いざ、現地で班行動をしてみると計画どおり行動することは思った以上に難しかったようです。見学のペースや歩くペースが違ったり、男女で話が合わなかったり、見たいお店が違ったり、バス停がたくさんあって迷ったり、思ったより歩くのに時間がかかってしまったりなど様々な困難に直面した班がほとんどでした。特に、2日目の班行動では何種類もの電車とバスを乗り継いでめまぐるしく動き回りました。その分、いろいろな荒波をくぐり抜けて2日目の夕方に宿舎「日昇別荘」にたどり着いたときの喜びは大変大きかったようです。班行動中に、班員と協力して荒波を乗り越えたことでさらに絆が深まりました。一人で抱え込まずみんなと協力することを学びました。一つ一つの見学地でいろいろなものを見、味わい、感じるすることができました。思うようにいかず困ったことがあった班もありましたが、だんだんと協力できるようになっていきました。班行動を通じて一人一人が学んだこと、これが修学旅行で得た一番の収穫ではないかと思っています。

修学旅行を終えて約3週間が経ち、あの3日間で得た経験を、今後の糧としていくために重要な事後学習に取り組み始めました。総合の学習の時間では班新聞の作成を行っています。たくさん場所を見学し、たくさんことを体験し、多くの思い出ができた修学旅行を一つの新聞にまとめる作業は思ったよりも大変なようです。でも、班で撮った写真などを見るだけでそのときの思い出がよみがえってきて、みんな和気あいあいと楽しそうに話をしながらどんな班新聞にするか考え、作業を進めています。『古都で学んだこと』と『3日間で培った絆』が詰まった班新聞に仕上がることを期待しています。10月29日の文化発表会で展示や発表を行いますので、ぜひご覧ください。

